

南海を埋め江戸町立て給ふ事

見しは昔○當君、武州豊島の郡江戸へ御打入りより以來、町繁昌す。然れども、地形廣からず。是に依つて、豊島の洲崎に、町を建てんと仰せ有りて、慶長八卯の年、日本六十餘州の人夫を寄せ、神田山を、引きくづし、南方の海を、四方三十餘町埋めさせ、陸地となし、其上に在家を立て給ふ。昔、平相國清盛公、津の國兵庫の浦に、新京を立てんと、七ヶ國の人夫を集め、島を築ぎ給ふに、くづれて島成就しがたし。其後、石面に一切經を書寫、其石にて築きければ、誠に龍神納受し給へるにや、島成就し、是に依つて、經島と名付けたり。其島の上に三町程の

在家を立て、末代に名を残し給ひぬ。是を今の豊島に比ぶれば、十にして僅か其一つに及べり。此町の外家居つゞき、廣大なる事、南は品川、西は田安の原、北は神田の原、東は淺草まで町つゞきたり。豊島の名に負ひ、民豊かに榮ゆる事、夫れ震旦の都は、家居百萬間とかや、中々是をくらぶるに足らず。天地開闢より、慶長までの世を考ふるに、此御代には若かじ。上一人の御恵み深ければ下萬民皆榮花に誇る。君が代は千代に一度ゐる塵の、白雲懸る山となるまで、久しかれとぞ祝し侍る。

盲目遠路を知る事

見しは今。江戸町に、下岡才兵衛と云ふ人、京へ上る。始めて

見聞集

の道なれば、善き連もがなと云ふ所に、座頭聞きて、「我れ此度、官の爲め上洛仕る。結縁に、盲目を同道有りて給べかし」と云ふ。才兵衛聞きて、「道知れる連をこそ願ひつれ。盲目は却つて道の妨げと思へども、結縁なり」とて同道し、品川に付きたり。然るに河崎への駄賃錢、出入れに付きて、才兵衛、馬主と問答し、断止む事なし。座頭聞きて、「あら詮なき問答かな。河崎までの駄賃定りて候程に、我は代物を渡し馬を取りたり。馬方申す如く錢を渡し道を急ぎ給へ」と云ふ、才兵衛聞きて、座頭盲目なれば、京までの遠路、駄賃差引をば、我れに聞かずして渡す事、不屈者なり」と叱る。座頭聞きて、「我れ始めての上洛なれ

ば、江戸より京まで、道の積り、馬次の在所を人に尋ね能く覺えたり。其上一里に付きて代物十六文つゞの定りにて隠れなし。御存じなくば語りて聞かせ申さん。江戸より二里参りて品川、是より二里半行きて河崎、二里半神奈川、一里半程ヶ谷、二里戸塚、二里藤澤、三里平塚、一里大磯、四里小田原、四里箱根、四里三島、一里半三枚橋、二里原、二里吉原、三里蒲原、一里由井、二里清見、一里江尻、三里府中、一里鞠子、二里岡部、二里藤枝、二里島田、一里金谷、二里新坂、二里懸河、二里半袋井、一里半見付、三里濱松、三里前坂、一里半荒井、一里白須賀、二里二河、二里吉田、二里御油、一里赤阪、二里富士川、二里

目見聞集

岡崎、三里池鯉鮒、三里鳴海、一里半宮、七里舟、桑名、三里四  
 日市、三里石薬師、一里半庄野、二里龜山、一里半關の地藏、  
 二里阪、二里土山、三里水口、三里石部、三里草津、四里大津、  
 三里京までの道、合百二十四里なり」と云ふ。才兵衛聞きて、  
 「盲目奇特に道を覚えたり」と云へば、座頭聞きて、「此上は京  
 まで、駄賃の差引をば、盲目に御任せ候へ」とて、遠路駄賃の  
 問答もなく、目有る人が、目くらに教へられ、江戸より京まで  
 上り付きたり。「されば、古へ、燕、蜀、兩國の戦ひ有りし時、一  
 盲衆盲を引くところ聞きつれ。盲人が明眼を導く事世に稀なり」  
 と云へば、老人聞きて、「愚かなる云ひ事かな。虫さへ道を教ふ

る謂れあり。吉備大臣は、元正天皇の遣唐使なり。在唐の時、  
 野馬臺の文を讀まんと欲す。文義解し易からず。蜘蛛糸を引き  
 て道を教ふる。則ち讀む事を得たり。扱又木人、道を教ふる例  
 し有り。唐土黄帝の御代に、蚩尤と云ふ者、涿鹿山の坂泉と云  
 ふ所にて、三年の間、黄帝と戦つて、蚩尤既に亡びんとする  
 時、口より霧を吐きて、天下を暗ます。故に東西を失ふ。黄帝  
 工夫を以て、風后と云ふ臣下に命じて、指南の車を作り、其上  
 に木人有りて、指を南にさして教ふる。帝の軍兵、方角を知つ  
 て、蚩尤を亡す。是木人の教へなり。故に指南と書くは此謂れ  
 なり」と云ふ。傍へなる人聞きて、「又針有りて、人に道を教へ」

見聞集

たる事あり。我れ先年、伊豆の國より伊勢へ渡海す。其海の間  
 に、駿河、遠江、三河、尾張四ヶ國有りと云へども、舟を碇つる湊  
 なし。故に東風の順風を得て、夜晝三日に伊勢の湊へ着岸す。若  
 し其内風替りぬれば、伊豆へ戻るに。左なければ舟を損じさす。  
 日本海中に類ひなき大事の渡りなり。然るに我が乗りたる舟、  
 日中により出し、夜に入りて大雨荐りに降り、俄かに荒き風四  
 方より揉み合はせ、帆を吹き下し、波に揺られて少時漂ひ、前後  
 方角を失ひ、今の風は舳より吹きたりと云ふ者有り。面楫取り楫  
 より吹きたると云ふ者もあり。只波の底に沈む心地せし所に、  
 楫取磁石を持ち、舟底に入り、火を燈し水に針を浮べて見れば

南を教ふる。皆人悦び、風は變らず東風なりと云ふ。其時舟中  
 の人々悦び、順風に帆を上げ、風波の難を逃れ、伊勢の湊へ翌  
 日着岸す。是遍へに針の教へなり。此く木、針すら、人に道を教  
 ふる例し有り、人は只心を修むべし。頼朝公は關東に有りて、  
 西海の平氏を亡し、謀を萬里の外に運らし天下を治め給ひぬ。  
 伶俐き人は柴の庵の内に居ながら後世の道を善く知る。萬法と  
 もに目をもて見んとするは愚かなり。只一心の工夫に在り、盲  
 は美しき色をも見ず。聾は面白き聲をも聞かず。是は形に在る片  
 輪なり。扱又形のみに限らず、心に智恵なければ、心も聾盲  
 の如し。阿那律は眼潰れて後、三千界を見る事掌の内なる物

自覚園集

を<sup>み</sup>見るが如<sup>ごと</sup>し。閉<sup>へい</sup>目<sup>もく</sup>則<sup>すく</sup>見<sup>けん</sup>開<sup>かい</sup>目<sup>もく</sup>則<sup>すく</sup>失<sup>しつ</sup>の古<sup>ふる</sup>き言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>、今<sup>いま</sup>思<sup>おも</sup>ひ附<sup>あ</sup>れり一  
と申<sup>まう</sup>されし。

慶<sup>けい</sup>長<sup>ちやうげん</sup>見<sup>けん</sup>聞<sup>もん</sup>集<sup>しよま</sup>卷<sup>まき</sup>の八

宗<sup>そう</sup>順<sup>じゆん</sup>だみたる聲<sup>こゑ</sup>を笑<sup>わら</sup>ふ事<sup>こと</sup>

聞<sup>き</sup>きしは今<sup>いま</sup>。杉<sup>すぎ</sup>木<sup>き</sup>宗<sup>そう</sup>順<sup>じゆん</sup>と云<sup>い</sup>ふ京<sup>きやう</sup>の<sup>ひと</sup>人<sup>ひと</sup>、江<sup>え</sup>戸<sup>ど</sup>へ下<sup>くだ</sup>り云<sup>い</sup>ひける様<sup>やう</sup>は  
「關<sup>くわん</sup>東<sup>とう</sup>は、聞<sup>き</sup>きしよりも、見<sup>み</sup>て愈<sup>いよ</sup>々<sup>く</sup>下<sup>くだ</sup>國<sup>こく</sup>にて、萬<sup>よろづ</sup>賤<sup>せん</sup>しかりき。人<sup>ひと</sup>  
形<sup>かた</sup>頑<sup>かたくな</sup>固<sup>こ</sup>に言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>詛<sup>なま</sup>りて、『なでう事<sup>こと</sup>なき』。『よろこばひて』など、  
片<sup>かた</sup>言<sup>こと</sup>計<sup>はかり</sup>を云<sup>い</sup>へるにより、斷<sup>ことわ</sup>り聞<sup>きこ</sup>え難<sup>がた</sup>し。拾<sup>しよ</sup>遺<sup>ゐ</sup>に、『東<sup>あづま</sup>にて養<sup>やしな</sup>はれ  
たる人<sup>ひと</sup>の子<sup>こ</sup>は、舌<sup>した</sup>だみてこそ物<sup>もの</sup>は云<sup>い</sup>ひけれ』と詠<sup>えい</sup>ぜり。扱<sup>さて</sup>又<sup>また</sup>宗<sup>そう</sup>  
碩<sup>せき</sup>、『片<sup>かた</sup>つ田<sup>ひな</sup>舎<sup>な</sup>は問<sup>と</sup>はるゝも憂<sup>うれ</sup>し』と前<sup>まへ</sup>句<sup>く</sup>をせられしに、『何<sup>なに</sup>とか  
はだみたる聲<sup>こゑ</sup>の答<sup>こた</sup>へせん』と宗<sup>そう</sup>長<sup>ちやう</sup>付<sup>つ</sup>くる。宗<sup>そう</sup>長<sup>ちやう</sup>は、生<sup>しやう</sup>國<sup>こく</sup>關<sup>くわん</sup>東<sup>とう</sup>の

見聞集

人なればなり。『都人問ふも愧かし舌だみて、うきことわりを何と答へん』と讀みしも實に道理なり。取分け、『べい』と云ひ、『べら』と云ふこそをかしけれ。是に付けても我が住みなれし九重の都、さすが面白き境地なり。人王五十代桓武天皇の御宇、十三年甲戌十月廿一日に、山城の國愛宕郡に都を遷されたり。男女の育ち尋常に言葉優しく有りけり』と云ふ、關東衆是を聞き、愚かなる都人の云ひ事ぞや。國に入つては俗を問ひ、門に入つては諱を問ふ。是皆定れる禮なり。知らぬ國に入り、其國の言葉を知らずんば、問はぬは非事なり。孔子は生れながら物を知れる智者なり。孔子も大廟に入りて、祭に與られたる時に、

事ごとに問はれしとかや。舜も大智の聖人にてましませども、萬に物を人に聞かしめ給ふ。知りたる上にも問ふが智者の心なり。然るに關東の諸侍、昔が今に至るまで、仁義禮智信を専らとし、文武の二道を嗜み給へり。民百姓に至るまで、筆道を學び、文字に當らざる詞をば、明白にも唱へず。此宗順は、文字般若に暗ければ、義般若に暗くして、却つて他を難ぜり。文字は貫道の器なり。器なくして善く此道に達すると云ふ事、豈夫れ然らんや。されば伊勢物語に、『よろこぼひて』と書かれしは『喜びて』なり。『なでう事なき』とは、『させる事なき』と云へる事なり。『べい』は『可』の字なり。言葉のつゞきに依り、『べし』とも、

見聞集

『べら』とも云へり。古今集に、『秋の夜の月の光の清ければ、暗部の山も越えぬべらなり』と詠ぜり。其上『知つて問ふは禮なり』とこそ古人も申されし。増してや知らずして、他を難ずるは非が事なりと云へり。

江戸の堺地世に越えたる事

見しは今。秋津洲國々の名所舊蹟、其數を知らず多しと云へども、中にも須磨、明石、難波、住吉、值嘉鹽釜、松島、小島の詠めこそ、猶も面白けれ。定家卿の歌に、『春よいかに花鶯の山よりも、霞ばかりの鹽釜の浦』と詠ぜり。又、『松島や小島いかにと人間はど、其儘語る言の葉もがな』と、西行法師讀めり。され

ども江戸海邊の眺望に、是を競ぶれば千分にして、餘は其一つにも能はず。然れば江戸の堺地、海上漫々として碧浪天をひたせり。朝には漁舟烟りを拂つて出で、夕には満舟快うして歸る。其外旅の波路を分け、出づる船、入る船數を知らず。東坡が詩に、『一葉萬里の路只一帆の風に任す』、と云へるも面白し。へりたる野の傍へに、蘆分小舟棹さして、尾花の波に浮ぶこそ、秋は得ならぬ詠めなれ。『武藏野や草葉皆から置く露に、末遙かなる月を見るかな』、と千載集に見えたり。立仍、豊島の海原見渡して、『青海やつく武藏野春の草』、とせられたり。亦兼如、江戸の川邊を見て、『見るが中に蘆邊角ぐむ干潟かな』、と云へる

見聞集

も又をかし。此河の水上を尋ぬるに、阿武隈川、思河、渡瀬川、絹川、利根河、此五つの大河、栗橋の上にて落ち合ひ、一つに成りて武野と下總の境ひ、角田川を流れて、此江戸港川へ落つ。上れば下る小船の棹のいとまどなかりける。扱又御城は西に當り、石垣おびただしく、御殿は南向きに立て給ふ、大木、古木並ぶ木の間より、高矢倉、角矢倉顯はれ、殿主は雲井に聳え、松風はあつから萬歳を呼ぶかと怪しまる、又廓外には、諸大名高廣たる屋形造り棟を並べ、町は軒を並べ、家居豊かに、烟り立つ民のかまどはにぎはへり。見渡せる舊跡には、淺草に觀音、湯島に天神、神田に大明神、貝塚に山王權現、櫻田山に愛宕、何

も何も新たにましませば、參詣の袖、晝夜とみに、貴賤群衆を爲せり。又諸宗寺々の古跡には、増上寺、吉祥寺、廣徳寺、彌勒寺、東光院、常樂寺、本願寺、此外寺町と號し、寺院僧坊は、東西南北に門を並べ、時々鐘鼓怠らず、見佛聞法、袖を連れ、踵を次いで人跡絶えず。是南朝四百八十寺の遠景にもすぐれ、大湖三萬六千頃にも越えたり。されば慶宗と云ふ旅人、當所初めて一見し、江戸の景風自ら時を得たり、櫻田、清水又尤も奇なり、紅楓の山色、土峰の雪、春夏秋冬四つながら猶宜し」と書きて、愚老に見せられたり。實に面白き客僧の言葉かな。清水が門に立つて夏かと思へば、時知らぬ富士の雪を見、櫻田に有

見聞集



りて長閑さ春かと思へば、紅葉山を詠め、四時變らぬ眺望、委細を是に記さば、車に載すとも擧げて數ふべからず。言語に絶する武藏の江戸の境地を、心有る人に見せばやとぞ思ひ侍る。關東海にて鯨突く事

聞きしは今。唐國にて鯨鯢と云ふ魚は、長さ數千里あり。波を叩いて雷を爲し、沫を吐きて雨霧を爲す。船をも飲むとなり。四足の魚と古記に見えたり。扱又日本に鯨と云ふ魚有り、鯨鯢の類ひと知られたり。長さ三十尋五十尋有り。日本に是に過ぎたる生類なし。愚老若き頃、關東海にて鯨取る事なし。死にたる鯨、東海へ流れ寄るを、人集つて肉を切り取り、皮をば煎じて油を

取る事度々に及ぶ。されば昔、貞應二年五月、鎌倉近邊の浦々へ名をも知らぬ大魚死して波に浮び、三浦崎、六浦の海邊へ流れ寄る、鎌倉中に充滿す。人擧つて是を買ひ取り、家々に是を煎じて油を取る、異香閭巷に満てり。士女是を早魃の兆しと云ふ。此魚の名知らず先規になし。是徒事ならずと文に記せり。貞應の頃まで、關東海に鯨有る事を人知らざるなり。今は鯨、江戸浦まで来て、潮を空へ吹き上ぐるを見れば、海上に焼く鹽屋の烟かと疑はる。是は息をする魚にて、海底に計は居られぬと知られたり。古歌に、「潮吹く鯨の息と見ゆるかな。沖に一村夕立の雲」、是は角の浦に讀めり。江戸浦にては、沖に幾村立つ雲、

目録

ところ詠め侍らめ。鯨をもちにて突くに、鯨とると云ふ。鯨は釣にてつるなるを、鯨とると云ふ。是海人どものそごる事と思ひしに、八雲抄に、鯨とる、鯨とると讀めり。鯨大魚なれども伊勢、尾張兩國にて突く事有り。是より東の國の海士は突く事を知らず。然るに文祿の頃ほひ、間瀬助兵衛と云うて、尾州にて鯨突きの名人、相模三浦へ來りたりしが、東海に鯨多く有るを見て、願ふに幸ひかなと、もり網を用意し、鯨を突くを見しに、鯨子を深く思ふ魚なり。故に親をば突かずして子を突き留め活し置く。二つの親、子を己が腹の下に隠し、己が身を水の上うへに浮べ、劍にて肉を切り割を辨へず、親子ともに殺さるゝ、哀

れなりける事どもなり。心有る人は二目とも見ず。殺生好む人は慈悲の心なき故、世の哀れをも知らず、罪の報いをも辨へざるの愚かさよ。外の濱に、うたふと云ふ鳥は、砂の中に子を生まて隠す。獵師母鳥の眞似をして、うたふと呼べば、子は、やすかたと鳴きて這ひ出づるを捕る。其時母空に此方彼方へつゝあるき、鳴く涙血の雨と降りかゝり、身を損じさす。故に簑笠を着て捕るとかや。古歌に、「子を思ふ涙の雨の笠の上に、かゝるも佗しやすかたの鳥」と讀めり、此く子を悲しむ鳥類も有りけり。只情なさは獵師の心なり。此助兵衛、鯨突くを見しより、關東諸浦の海人まで、もり網を仕度し、鯨を突く故に、一手に百二

見聞集

百づつ毎年突く。早廿四五年以來突き盡し、今は鯨も絶え果て一年に漸う四ツ五ツ突くと見えたり、今より後の世、鯨絶え果てぬべし。此の如きは大殺生、天竺唐土にも聞及ばず、一寸の虫に五分の魂有りと俗に云へるなれば、五十尋百尋有る鯨の魂如何ばかりならん。梵網經に、「我れ一切萬物に随つて生を請けずと云ふ事なし。故に六道の衆生は皆是我が父母なり。然るを殺し食するは、父母を殺して食ふ」と説かれたり、一生の身を助げんとて、多生の苦を思はず、恣い儘なる生死妄業に着し、流轉の境ひを離れざるは、愚癡の至りなり。故に非を知つて改むるを賢き人と云へり。生とし生る物、命を惜む事大山より重し。

佛は十惡罪の始めに殺生を出だせり。五戒も殺生戒を第一とす。此殺生の根源を尋ぬるに、慈悲心なく慾より起る、三毒と云ふも貪欲を第一とせり。鯨殺す人、生死の海に沈淪し、六道四生の業逃れ難しと云へり。

村岡茂兵衛あるじまうけの事

見しは今。江戸通町、或る人の許に、思ふどち六人差し集り、世上の事、身の上までも、心に残さず語る所に、村岡茂兵衛と云ふ人云ひけるは、世に貧程辛き物はなし。如何にと云ふに、去々年、兩替町の理助、武左衛門兩人へ、さる客の相伴に行き、饗應に逢ひたり。此兩人福祐たるにより、大きに書院を立て、

見聞集

疊屏風美々しく、庭に植木有りて、深山を見るが如し。扱美膳の次第、料理残る所なし。其上茶壺の口を切り、極上を建てられたり、世に在らば、誰も此くこそあらまほしけれ。我れ果報拙き故、願ひて甲斐なし。されども人の饗應に逢ひて、夫を報ぜざれば心に懸かる。愚不肖なれば、住居は詫びても苦しからず、第一、椀折敷持たず、萬足ざる事のみ多し。其上我れ料理方を知らず去々年より心計りにて打ち過る事、無念口惜しと云ふ。權左衛門と云ふ人聞て、三年心懸りの悼ましきよ。只二人なり。呼び給へ、某椀折敷をば貸すべしと云ふ。又一人、我れ酒作り也。上々の酒を、三升の徳利一つ合力すべしと云ふ。又一人、我れ

肴町に有り、何時なりとも、新らしき肴遣すべしと云ふ、愚老聞きて、此程旦那坊主能き茶一袋呉られたり。則ち其茶を持参すべしと云へば、又一人、料理をば某に任せ給へ、縦ひ何なしとも、しをらしく仕立て出だすべし。其上我れ能き味噌を持ち合せたり。古人云ふ、「味噌は百味の親、雑掌に尤も第一なり」と云々。凡そ味噌と云ふ事を香と云ふ子細有り。源氏に曰く、香盡しに日晩しと云ふ香の名有り、又公卿殿上人は、味噌を日晩しと宣ふなり。雑人中人の言葉に、味噌を虫と云ふ。是は日晩しと云ふ名を持ちて、香と云ひ虫と云ふなり。源氏の香づくしの中に日晩しと云ふ香は、匂ひも優れて染み入りたる香なり。物

目録

に移りて匂ひも深し。其心を取りて、日晚しと名付けたり。日晚しは虫の名なり。始めは蟬なり。衣を脱いて後を日晚しと云ふなり。是に依つて蟬は夏の季なり。日晚しは秋の季なり。さる程に連歌に、蟬と日晚しは同じ物かな。故に節の中を嫌ひ、懐紙を變へて用ゐる。竹林抄に、「秋來るからに袖は濡れけり」と云ふ前句に、「日晚しの鳴けば空蟬音を絶えて」と能阿法印付け給ひぬ。殆んど味噌は一切の物に染みて匂ひよし、味ひ善き故に香と名付けたり。味噌は優しく源氏物語にも記されたり。我れ味噌を持參すべしと云ふ。茂兵衛聞とて、あら嬉しや仕度せんと、宿に歸り家を見れば悲しきかなや、「自ら朽残りたる門柱、我が

家いかで立直すべき」と讀める古歌も身の上と思ひ出侍りぬ。草屋の片端を、四疊敷、葭垣に仕繕ひ、壁の頰れを所々ぬり直し、反古にて腰ばりし、四邊の煤を拂ひ、天井見苦しとて葎を編みて上を隠し、濡れ椽長さ一間横二尺、青竹にて簀の子をかき、少さう庭を萩にて垣こめ、草花を植ゑ置く。秋の暮れ方、端居して月を詠むれば、「土壁のぬり残したる窓までも、漏さず宿る秋の夜の月」と讀みし歌も哀れに思ひ出てけり。大方座敷出來ぬと、兩人へ三日以前に、來る明々十五日の晩、御食申すべしと使札を遣す。兩人忝く候、來る十五日の晩必ず參るべしと返札有り。茂兵衛喜び、此催し晝夜心懸くるに隙なかりけり。早

見聞集

十五日にも成りければ、五人の友達衆、約束違はず皆々來り集りて取り持ち給へり。扱料理も出來、日も八ツ時分なり。はや御出候へ、御時分能く候と人を遣す。理介返事に、昨晚も御念入られ御使今朝より御時分待兼申したり、只今參ると云ふ。茂兵衛聞きて、理介殿御時分待兼候とは満足なり。はや御出なるべし。やれく、疾く汗鍋懸けよ、鱈をあへよ、料理の加減善かるべし。此理介殿をば律義の助とこそ申すべけれと響ひる所に、使又云ふやう、武左衛門殿は、今朝何處へか御出、行く先きも知らず、定めて知人の所にて、例の酒宴して、酔にまどひ夜に入り歸り給ふべしと、内の者ども申す由を云ふ。茂兵衛聞きて肝

を消し、こはそも何事ぞ、夫は誠か。昨晚使の返事にも、必ず明晩參るべしと申しつるが、但し失念したるか、扱も惚者かな、呆け物かな。此武左衛門は、誠の不届左衛門なり。やれ不届が行方を、早々行きて尋ねよくと腹立つ所へ、理助來りたり。茂兵衛愈々心煮られ、理介殿は御出でなり、不届左衛門が行方を、急ぎ行きて尋ねよくと重々使を立つれども、行方知らず待の所に、はや日は七ツ下りなり、不届左衛門來て云ふやう、今晚の御食、碯と失念し、神田町知人の所へ行さけるに、酒宴の場へ踏み懸り、今朝より暮まで數盃給へ酔ひ候へども參りたると云ふ、茂兵衛氣を損さし、火を燈し膳を出す、不届左衛門は、膳

目見聞集

に向ひ箸を取りたるが、柱に打ち懸りぬねぶり、片箸をば疊に墜し、片箸をば膳に散じ、時々大駟聲かさ、目を覺しては獨りくり言云ふ。漸く食過ぎ、理介云ひけるは、萬御念入り残る處なき御饗應故、御食能く給へたり、武左衛門殿は御酒氣、御亭主は下戸にてましませば大盃にて、一盞に下さるべしと、汁椀にて一ツ飲み、はや湯を御出し候へと云ふ所に、不届左衛門目を覺し、食は給へずとも酒に於ては、理介に劣るべからずと云ひもあへず打臥し前後も辨へず、友達衆是を見て、茂兵衛殿腹立ち斷りなり。人を饗應さんには、高さも卑しさも心安からず。其上客遅く來る時は、誰とても心煮られ氣を損さす物なり。

前車の覆へるは後車の戒めとかや。我れ人辨ふべき事なりと云へり。

雲藏乞食の事

見しは今。雲藏と云ふ若き者、江戸町に在りけるが、神田町の眞行寺と云ふ寺へ行き、住持に達ひて云ひけるは、某親紺搖にて、身上形の如く送りしが、三年已前に死に別れ、家跡職請取り紺屋を仕り候が、卑しき職にて、手に糊付き、染物に身を汚し、冬は水遣ひに手足冷え、彼是嫌なる業にて心に染まず、させる得もなし、中々遊びたるが増なと云うて、月日を暮し、今我れ貧しくなり、親譲りの家屋敷、眷族をも皆賣り盡し、妻を

も去り、只獨り身となり、一衣着たる計にて寒く候へば、古紙衣を一ツ賜はつて、風を防ぎ、御寺の沙彌に成り候へしと云ふ。老僧聞きて、思ひ寄らざる申し事かな、悪弟を貯ふる者は、師弟地獄に墮す、能き弟子を養ふ者は、師弟佛果に至る。禍福は門なし唯人の招く所に在り。其上紺搔は卑しき職に在らず。目出度仔細あり。紺搔の起りを語つて聞せん、是は奥州信夫と云ふより始まる。彼の信夫と云ふ所に、一人の侍有り。都へ上り公の事に仕ふ奉るに依つて暇を得ず。年月を送る程に、古郷へ下の事搔き絶えたり。彼が妻の女の遠き都の住居を思ひ遣り、男を戀ひて、終日泣き暮し、終夜泣き明す、其涙次第にこぼれて、

紅に成りてながれける。白き袖小袖に懸りて染色になる。又へいしゆの如し。是を其國の人、見移し、賢き者有りて、摺と云ふ事に成す人多く着てんけり。次第に摺る程に、信夫摺と云ひて都へ上る。是を御門に捧げ奉る、「陸奥の信夫文字摺誰故に、亂れ初めにし我れならなくに」と讀める歌是なり。其後世の人賢く成り、摺と云ふより便りて、紺と云ふ事になし、又紋と云ふ物を絞り出したり。前は藍ばかりにて着る物染しが、後は染殿と云うて、紅などにて染むるなり。綾織と云ふ事又出来、衣裳の紋を織付けたり。然るに帝の御衣に紋を織る子細あり。正月より十二月に至りて三十六重の御衣を織る、一月に三ツ宛に



配つて三十六なり、是を十日づゝ召すなり。正月一日より十日まで召さるゝ御衣をば、子の日の御衣とて、小松を織る。青色なり。中旬に召す御衣は、若葉の御衣とて、七草を織る。小袖紫なり。下旬には、霞の衣とて空色に織る。白し。此の如く十二月を註し織るなり、扱又、後の御衣の事、月に一ツづゝ、一年に都合十二重なり、爰を以て十二一重と申す也。總じて衣裳に紋を出だす事紺搔、綾織、目出度者なり、然る所に、汝人間の一大事、家職を疎かに思ふが故、今其姿に成り果てたり。結縁に因果の斷りを語りて聞かせん。夫れ三世流轉、廿五有の有り様、山野の獸、恒河の魚介、生さとし生ける物、始もなく終

もなく、生々世々車の廻るが如く、六趣四生を出でやらず、苦しみを受る處に、如何なる宿善や催しけん、今人と生るゝ事、多生の善因深きに依つてなり。仰ぎても猶餘り有りぬべし。提謂經に、「人間の生を受くる事、例へを取る時、天の間に針を立て置き、天より糸を下して、大風の吹く時、彼の針の耳の穴に、糸を入るゝ事は有りとも、人身を受る事猶難し」と説き給ふ處に、請け難き人と生れ、貧しうして生ける功なし。佛は人間を一人子の如く憫れみ悲しみ思し召し、現世無非樂後生善所と守り給へる所に、不如意すれば佛の御恵みにもはづれたり。妙樂大師、人間に八ヶの大事を擧げられたり、「一日の大事は食物、一年の

大事は衣服、一期の大事は住居、男子の大事は敵人、女人の大事は難産、百姓の大事は地頭、財寶の大事は盜賊、後生の大事は地獄」と云へり。汝是程目出度住所に有りと云へども、身の辨へを知らず、徒らに數日を送る事云ふに絶えたり。總べて身上の大事と云ふは家職なり。夫座頭は平家を語つて世を送り、大は舞を舞ひて境界を養ひ、此坊主は經を善く讀み、此大寺の主たり。其方親は家の業を能く成したる故富みたり。汝は家の職を忘るゝ故に其姿に成りたり。今生貧しければ後生又然なり。かるが故に佛は、「未來の果を知らんと欲せば、現在の因を見よ」と説かれたり。無殘や汝生々世々苦みを請くべしと仰せ

ければ、雲藏泣々門外へ出て、乞食して世を送る、左傳に「其父薪を割く、其子負ひ荷ふ事能はず」と云へり。是は子として父の跡を嗣ぐ事能はざる者を云ふなり。此句を以て、父の跡、師匠の跡を善く傳ふるを負荷と云へり、「生れ劣れる子は哀れなり」と云ふ前句に「此世より後の世や猶憂からまし」と宗養付け給ひぬ。皆人雲藏乞食を見て、是こそ我れ人の子供の鏡なれと云つて、子供折檻には、雲藏と異名を呼ぶ。扱又人の子の不届を見ても、雲藏と仇名を呼ぶ、當世の流行り言葉なり。是に依つて賢き子供は、雲藏と名を呼ばれじと慎みを爲すと見えたり。

見聞集

慶長見聞集卷の九

老樂齋身持を沙汰する事

見しは今。老樂と云ひて、年寄りたる下郎有り。若さ比骨を碎いて身上を拵ぎ、錢を貯へて後、山城の國愛宕山の麓、谷水と云ふ在所の邊りに居住して有りしが、毎月朔日一度づつ、世間の身持を沙汰する。此物語を聞く人は、必ず福者と成りて、長く榮花に逢ふべしと云ひ習はす。我れ其比京へ登りたりしが、此由を聞き、願ふに幸ひかな。左様の事ならば、關東より態々上りても、是を聞かでは有るべきかと、月の朔日を待ち得て、

急ぎ谷水と云ふ在所を尋ね行きしに、此談義を聽聞せんと、老若男女群集す、八十有餘の翁、鬢髭白髮なるが、三尺ほど高さ床に上りて云ふやう、夫れ、佛法世法は車の兩輪の如く、鳥の兩翼に譬へたり。然るに佛法修行と云ふは、若さ比教化を、廿年三十年修行し、後の世に黄金佛と成つて、樂しびに逢はん事を、善く推量したるを智者上人とは云へり。爰に春屋和尚と申して、貴とさ人まします。檀那問ひけるは、極樂へ疾く参りたしと云ふ、和尚一首を詠ず、「罪科の重さを救ふ方便は、極樂よりも地獄成りけり」、煩惱の大海に入らずんば、菩提の國を得べからず、先づ地獄に入るべしと宣ふ。是尤も殊勝なり。又或る

見聞集

人、善をば何と爲すべきやらんと問ふ。僧答へて、殺生せよ、殺生せよ。殺生をなせば、地獄に入る事矢の如しと云はれたり。是も有り難し。されば佛は現在の過を見て、過去未來を知ると説かれたり。然る時は現在にて三世明白なり。今生貧しければ後生又然なり。故に佛法世法は車の兩輪と云へり。扱又世法修行と云ふは、身體髮膚を父母に請けし形を變へず、其儘にて、若き比より老いて樂むべき事を修行せり。身體敢て毀ひ傷らざるは孝の初めなり」と孝經にも書かれたり。樂天が云く「一期の計は幼稚に在り」となり。道品々に替ると云ふとも、他の寶を數へて半錢の得有るべからず。只我が身を省りみ、油斷不機根にして、

立身成り難し。人となる者は安からず。安かる者は必ず人とならず。錢を貯へて後、現世安樂の福人と呼れんは、佛の位に均しからずや。我等、方々請け難き凡夫人身を此に受けて、一世樂しびに逢ふ事、只是錢に若くはあらず。されども是を得る事難し。爰に貧者、鞍馬の毘沙門へ參籠し、福を祈りける處に、社壇より百足虫一ツ這ひ出でたり。是は如何なる子細ぞと神主に問へば、彼の百足虫の際もなく、手足を動すを見よとの教へなり。是に付きても、皆人宿に晝寢して、心安く有るべき身が、是まで遠路を運び給ふ志、返すくも有り難く頼母しく覺え侍る。遠き所も出立つ足許より始まると、古人の申し置きしも、立

見聞集

身の肝要、諫めを云へる成るべし。山も麓の塵泥より起つて、天雲の棚引くまで生ひ上るが如し。されば堺に、鴨屋宗安と云ひて、有徳なる人有り、此人に貧者逢ひて云ひけるは、金を願へども來らざるは如何にと問ふ、宗安答へて、「先づ錢を願ふべし」と云ふ。實に錢は願ひ安かるべし、一錢輕しと云へども、重ぬれば貧しき人を富める人と爲す。扱又京立賣宗和が所にて、碁會有り、本因坊と、利立との碁、打亂れ、興に乗じ、利立一手打つて、「屋張の國內海の浦に、大網を下したり」と申しければ、本因坊一手打て、「一目づゝも濱をたしなめ」と云はれたりと、人語る。本因坊の云へること金言なれ。此心持有る故に、利立

半石強く、名人の譽れ、天下に聞え有り。此人算砂と名付けたるは、猶以て殊勝なり。砂を數ふるならば、其中に金を拾ふべし。古記にも、「砂石を拾ふ者、必ず金玉を得べし」と云へり。されば沙汰の二字は、いさごをえると讀めり。夫れ如何にとなれば、金と砂と取交へ、夫々に撰り分け、金の道理を取りて、非の砂を撰び捨て、是非分明なり。然るに今日の世法、旁々徳分に、五ヶ條の金言を沙汰する者なり。是を善く聞覚え、束の間も忘るゝ事なかれ。

一 第一人間の定命百歲其上不定の事  
 一 第二家職に油斷なき事

三才圖會

一第三一錢を遣ふに安からざる事

一第四微塵積つて山となる事

一第五尺蠖が身を屈むるも、一度は伸びんが爲なり。然るに錢

有りて用ゐざらんは、有財餓鬼と名づく。其上我れだに善く、

物食ひ心安くあらばと願ふは、只蚊虫の如し。小人は獨樂しむ、

君子は衆と樂しむ」と古人も云へり、是を耳の底に善く留めな

ば、徳の來る事、火の乾けるに着き、水の下るに順ふが如し。

何とか富貴の家に至らざるべき、穴賢。と云ひければ、皆人聞き

て有り難しとて退散せり。

江戸町衆花を愛する事

見しは今。江戸の町人、富めるも貧しきも心優しく有りけり。

僅なる庭の邊りにて、花木を植ゑ置き詠め給へり。誰とても此

る風雅こそ願はしき事ならめ。一花開くれば四方の春長閑にて、

紅花の春の晨、紅錦繡の装ひかや。りうこうそんが詩に「洛陽

三月春錦の如し」と作れり。實にも花故に里も鄙びねば、江

戸はさながら花の都、匂ひ芬々として、往さ來るさに花の摺り

衣、色香に染まぬ人もなし。傳へ聞く、醍醐雲林院の花は、九重

に匂ひ薫ず。其比は君も君たる故、政正しく、佛法王法盛んに

して花も香を増し色も妙なり。此花を見る人は愁ひを忘れ悦び

あへり。さる程に忘憂花合歡櫻と、皇より號し給へり、今又

見聞集

目出度御時代なれば、花も心有りてや匂ふらん。若し俄かに、  
 山風、野風、吹き来て、妙なる花をや散らざんと、硯、薄紙を  
 懷中し、花の下の狂仁雲に似、霞の如し。心々に詩を嘯き歌を誦  
 し給へり。是に付けても古へ詩人歌人の花の詠こそ面白けれ。  
 躬恒が歌に、「いも安く寝られざりけり春の夜は、花の散るのみ  
 夢に見えつ」と詠ぜり。西行法師、「願はくは花の下にて春死  
 なん、其二月の望月の比」と讀みしもいとをかし。樂天が詩に、  
 「遙かに人家を見て花有れば便入る、貴賤と親疎とを論ぜず」と  
 作れり。紹巴の發句に、「武藏野も果あらん花の吉野山」、又智溫  
 は、「花一木植ぬ都の宿もなし」とせられしも、今江戸町の様

に思ひ出でられたり。昔或る王、都の内の家居毎に、花を植ゑ  
 て愛し給ふ、夫より花浴と云ふ事始りぬ。古今集に「見渡せば  
 柳櫻をこそ交せて、都ぞ春の錦なりける」と素性法師詠ぜり。  
 昔、都に櫻町の中納言と云ふ人は、櫻を愛し給へり。猶も吉野  
 の櫻を移し四方に植ゑ置き、其中に屋を立て住み給ひければ、  
 皆人此町を櫻町と云ふ。中納言をば櫻町の中納言とぞ云ひける。  
 七日に花の咲さちるを嘆き、泰山府君を祭り給へば、三七日齡を  
 延べたりければ、此ぞ思ひつゞけて、「千早振荒人神の神たれば、  
 花も齡を延べにけるかな」と詠ぜり、皆人今宵は、花の下臥し  
 て、おぼろ月夜に若く物はなしと打す詠め、「寐ぬる夜を花の思

目見聞集

はん朝かな、と聽雪せられしも、花に來て寝ぬる者をば、花も  
 大切に思はんと云ふ心かや。されども、「花見にと家路に遅く歸  
 るには、待つ時すぐと妹や云はまし」と讀みしも又をかし。誠  
 に人の心の浮き立つ者は春の氣色なり。宗砌の發句に「何れ見  
 ん花の俤月の顔」とせられたり。てうとくりんが、こうせい  
 るに「春の月を翫ぶに秋の月にも勝れり」と云へり。月さへ春  
 は秋に勝れり。などと思ひ々々心々に、舊事を雜へ云ひ語らひ、  
 木の本毎に休ひ、花を友と明し暮し給へり。或る人は是を見て申  
 されけるは夫人の恐るべきは、執着愛念なり。生死の久しく流轉  
 する事愛欲の致す所なり。古今集に「大方は月をも愛でじ是ぞ

此、積れば人の老と成る者」と讀めり、此歌を能く沈吟せば、  
 人の教誡の端たるべし。草木、經を説くと云ふは、春花咲き、  
 秋紅葉する、是教へなり。只人は無道の身に迫りぬる事を、心  
 にひしと懸けて、束の間も忘るまじきは此一事なり。さあらば  
 此世の濁りも薄くなり、佛道を勉むる心も忠實成るべし。執心  
 を斷ち、色欲を止めて、眞實の解脱の門に入らん事を願はし  
 き事ならめ。心を物に留むる時は、微物と雖も以て病とす。さ  
 れば謝良佐は程子の能き弟子なり。一ツの硯を持ちて寶としけ  
 るを、程子物を翫へば志を失ふと云ひければ、良佐、汗を流  
 して其儘硯を捨てたり。志を寓すると留むるとの二ツを能く辨

見聞集



ふべき事なり。古への莊周は、片時の眠りの中に、胡蝶と成つて百年が間、花の園に遊ぶと見て覺めぬ。詞花に「百年は花に宿りて明しけん此世は蝶の夢にこそあれ」と讀めり。又一人に見えなば夢よことわれ」と云ふ前句に「誰が魂か哀れ胡蝶と成りぬらん」と宗祇付けられたるこそ殊勝なれ。此句に基づき察するに、江戸の町衆には、胡蝶や生れ來ぬらん、莊周や分身したりけん、花の下の狂仁、果敢なき夢の戯れを爲せり。新古今に「詠むとて花にも痛く馴れぬれば、散る別れこそ悲しかりけれ」と詠ぜり。此く色に愛て、香に染むる事を基として、善き道をしらず、人間は色慾の二ツに迷へり。恐るべし。此執心執着を

離れ、浮世を夢と悟り、身命を幻の如く思ひて、世を厭ひ、出離解脱の道に入り給へかしとぞ申されける。

唐船作らしめ給ふ事

見しは昔。慶長年中家康公、唐船を作らしめ給ひ、淺草川の入江に繋がせ給ふ。此る大船を作り海に浮ぶる事汀にては人力も及び難かるべし。如何様なる手術有りて出づるや、更に分別に及ばず。先年江戸御城、石垣を築かせらるゝに依つて、伊豆の國にて大石を大舟に積むを見しに、海中へ石にて島を突き出し、水底深き岸に舟を付け、陸と舟との間に柱を打渡し舟を動かさず、平地の如く道を作り、石をば臺に乗せ、舟の中に捲車を仕付け

見聞集

て綱を引き、陸にては手子棒を持つて石を推し遣り舟に載する、舟中に捲車の工み奇特なり。古歌に「我が戀は千引の石の泣く計」と讀めるは、千人して引く石を千引の石と云へり。今の時代には、大名衆、西國の大石を大舟に積み江戸へ持來て、千人引は扱置き、三千人五人引の石を、幾千とも數知らず引給ふ事おびたゞしかりけり。扱又唐船海中へ出だす事、海に綱引捲車も立てがたし。陸にて手子棒も及ぶべからず。されば昔實朝の時代、鎌倉由井が濱に於て唐船を作らしめ給ふ。是に子細あり。奈良より陳和卿と云ふ者、鎌倉に參着す。是は東大寺の大佛を作りたる宋人なり。されば東大寺供養の日、右大將家奈良へ進

發、此寺へ參詣、結縁せしめ給ふの次にて、頼朝公、和卿に對面有りて、後世の道を聞かせしめんがため、しきりに以て命ぜらる、といへども、和卿が云ふ、貴客は多く人命を斷しめ給ふの間、罪業是重し、値遇し奉り難し。其憚り有りと云々。依つて遂に調し申さず。されども當時の將軍實朝に於ては、權化の再誕、恩顔を拜せん爲め、參上を企つるの由是を申す。即ち筑後の左衛門尉朝重が宅を轉ぜられ、和卿が旅宿とす。先づ大膳大夫廣元朝臣を御使として遣はさる。其後和卿を御所に召され御對面有り。和卿、實朝を三度拜し奉り頗る涕泣す。將軍家其禮を憚り給ふの所に、和卿申して云ふ、貴客は古へ宋朝育王山の

白元集

長老たり。時に我れ門弟に列すと云々。實朝仰せられて云ふ、  
 此事さんぬる建暦元年六月三日丑の刻、將軍家御寢の間に、尊  
 僧一人御夢中に入つて此趣を告げ奉る。御夢想の事、敢て以  
 て御言葉に出だされずの處に、六ヶ年に及びて、忽ち以て和卿が  
 申し狀に符合す、仍て御信仰の外他事なし。然る所に將軍家、  
 先生の御住所、育王山を拜し給はんが爲、唐土に渡らしめ給ふ  
 べき由、思し召し立つに依つて、唐舟を修造すべき由、彼の和卿  
 宋人に仰せ付けられたり。御供の人六十餘輩に定め、結城朝光是  
 を奉行す。相州、武州しきりに是を諫め申さるゝといへども、  
 御許容に能はず、舟の沙汰に及ぶ。漸く唐船出來し、彼の舟を

出さん爲め、建保五年四月十七日、數百輩の匹夫を、諸々の御  
 家人等に仰せ付け、彼の由井の濱に浮べんとす。實朝公御出有  
 りて監臨し給ふ。信濃守行光、今日の行事として、諸人は引  
 く事、午の刻より申のなゝめに至る。然れども此所の體たらく、  
 唐船出づべき海浦にあらずと、諸人申しければ、將軍も見捨て  
 て還御し給ふ。此舟徒らに砂の上に朽損すと、古記に見えたり  
 と云へば、人聞きて、唐舟作るには、地形と湊を専ら見立つる。鎌  
 倉の浦は、常に汀の波高く、遠淺海にして、小舟の出入も安か  
 らず。如何に况や唐舟をや。天下の主の御威勢にても出づべか  
 らず。宋人も、番匠も、舟を陸にて作る事のみ思ひて、海へ出

見聞集

すべし事を辨へざるは愚の至りなり。陸より唐船を海へ浮ぶる  
 方便なくして出でがたし。夫大石に足はなしと雖も、舟に置き  
 ぬれば大海萬里を過ぐる。是も方便に依つてなり。先年作らし  
 め給ふ淺草川の唐舟は、伊豆の國伊東と云ふ濱邊の在所に川あ  
 り。是こそ唐舟作るべき地形なりとて、其濱の砂の上に、柱を  
 敷臺として其上に舟の敷を置き、半作りの比より砂を堀上げ、  
 敷臺の柱を少しつゝ下げ、堀の中に舟を置き、此舟海中へ浮べ  
 る時に至つて、河尻を堰きとめ、其河水を舟の有る堀へ流し入  
 れ、水の力を持って、海中へ押し出す、此工みを昔鎌倉の人は知  
 らざるにや。

慶長見聞集卷の十

藤次善と栖を求むる事

見しは昔。上野の國岡根と云ふ山里に、藤次と云うて、身貧し  
 く姿無骨なる者有りしが、六七年以前、江戸へ來り、志葉の町  
 盡れに、少なき草の庵を結び、月日を送りしが、年を追ひ其身  
 宜しくなり、今は江戸、榮ゆる町にて、家屋敷を求め、萬  
 什物を貯へ、人の交りを睦くす。常の振舞ひ、殊人に勝れたり  
 と諸人に譽められ、目出度ぞ榮えける、「賤しき身として思ひ捨め  
 や」と云ふ前句に、「立ちぞ寄る人を厭はぬ花の陰」と兼載付け

見聞集

給へり。此者古郷に居るならば、一期貧しく、心愚に有り果つべ  
 き身が、生所なれども見捨て、繁昌の江戸へ來り、人の形儀作法  
 を見習ひ、仁義の道を學び、今人と云はるゝ事、是善き住所に在  
 るが故なり。人間は天理と云ひて、此理を持たぬ人は有らぬど  
 も、夫を分明せざるに依つて、萬に迷へり。其上心愚なる人、  
 學ばずんば道を知り難し。先哲も一期の大事は住所と云へり。  
 實に人間一期樂しむべき栖を、肝要と求めずして、生所を慕ひ、  
 舊縁に繋かれ、徒らに一生涯を送り暮すは常の習ひなり。孟母  
 と云ふは孟軻が母なり。母家を墓所の近くに作る、軻幼ならし  
 て戯れに、葬送の事を明暮なす。母是を見て、此所然るべから

ずと、市の傍らに住す。軻又賣買の事を學ぶ。母爰も益なし、  
 疾く勸學院の傍らに住まむ。學者達出入に、書籍を翫ぶを見て、  
 軻是を學ぶ。時に學半に母の家に来る。母の云ふ、學び得たり  
 やと問ふ。軻半學ふと答ふ。其時母機物を織りけるが、中より  
 切りて見せたり。軻是を見て頓て心得、學堂に歸つて學を窮め、  
 天下一の學匠と成る。扱又頭 虱と云うて、虱は住所に依つて  
 色々なり。首に住むは黒し、身に住むは白し。麝香はかやを食し  
 て香ばしい。此の如く人も住所に依つて、悪人とも智者とも成  
 るべし。花山院御製に、「木の本を栖とすれば自ら、花見る人と  
 成りぬべさかな」と詠じ給ふ。扱又昌叱「詫びて住とも都なり

見聞集

けり」と前句をせられしに、「遠近の花の梢をみざりにて」と紹  
巴付けられたり。此る目出度江戸の花の都を余所に見て、片田  
舎に住み果てんは、愚なる心にあらずや。

花の詠に品替る事

聞しは今。安齊と云ふ人云ふ様、世に人の翫ひ給ひけるは、雪  
月花に若くはなし。中にも我は四時ともに、色香妙なる花こそ  
面白けれども、散る別れを悲しみ、咲かぬ間を遅しと嘆き、「菊後  
梅前花を待つ心、釋迦彌勒の間」と詩に作りたるも我が心に同  
じ。天智天皇、近江の國志賀の郡大津の宮にまします時、四季  
に花咲く櫻を植ゑ置き詠め給ふ、是を志賀の花園と云へり。此

ばかり目出度櫻、今の世にも願はしき事ぞかし。歐陽公、花を植  
うる詩に、「淺深の紅白宜しく相交ふべし。先後猶宜しく次第に  
植うべし。我れ四時酒を携へ去らんと欲す、一日をして花開け  
ざらしむるなかれ」と云ひしも誠に優しき心なり。自然齋の發  
句に、「咲かぬ間を慰め草の花もがな」とせられしも殊勝なり。  
昔人は色殊なる品々の詠にも、似物の花と名付けて、詩人歌人  
の詠吟せり。雲を見て圓徳法印の歌に、「をしなべて花の盛りに  
成りにけり、山の端ごとに懸る白雲」、是を雲の花と云へり。波  
を見て伊勢が歌に、「波の花沖から咲きて散りくめり、水の春と  
は風やなるらん」、是波の花なり。雪を見て友則の歌に、「雪降れ

ば木ごとに花を咲きにける、何れを梅と辨きて折らまし、是雪  
 の花と云へり。扱又そうけい連無が詩に、富士山を見て、「六月の  
 雪花をせいをひるがへす」と作りたるも面白しと云ふ。古庵と  
 云ふ、人聞きて安齋古歌を覚えて、花をのみ色々様々に愛し給へ  
 ると云へども、世の習ひとして、色ある物遂には消え失せぬ。  
 我は永久に散らぬ花をこそ詠むれと云ふ。安齋聞きて、是は不思  
 議なり、何れの花ぞと問ふ。古庵答へて、其方の詠め、我が詠  
 めも同じ詠めなり。されども見所に相違有り。夫何にとなれば、  
 安齋は目前の花を見るに依つて散る。我れは其言葉の花を詠む  
 る故に散らず。歌に、「如何にして言葉の花の残りけん、移ろひ

果てし人の心に」と詠ぜり。又「惜めども散る紅葉なりけり、  
 と云ふ前句に「何も見る心の花に伴ひて」と宗祇付け給ひぬ。  
 是皆自己目前の見所に替りあり。古今和歌集に「夫大和歌は、人  
 の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける」と書かれしは、月  
 花を愛で、鳥を羨み、霞を哀れみ、露を悲しみ、昔神代より今  
 に至るまで、萬の言の葉を讀み置き給へども、風情盡る事なし。  
 此言葉の林の花は、咲きしより散る事なく、種に種の數そひ、  
 枝に枝廣がり、世界に充ちて、世とともに薫す。古へ歌の葉と  
 聞えし柿本人麿「ほのく」と明石の浦の朝霧に、島隠れ行舟を  
 しぞ思ふ」と讀まれたるは、三世不可得の道理を表はせるとか

見聞集

27/12/40

や。能因法師、伊豫の國へ下りし時、雨を祈りて、「天の河苗代  
 水に堰さくだせ、天くだります神ならば神」と讀み給ひければ、  
 忽ち大雨降りしぞかし。西行法師の詠に、「埋木の人知れぬ身と  
 沈めども、心の花は残りけるかな」と讀みしをこそ信用すべけ  
 れと、互ひに證歌を引きて意趣を争ふ。老人聞きて、「いや〜何  
 れの詠も誠にあらず。自他の差別あるは妄想なり。眞實の道理と  
 云ふは、自己目前一枚と見る眼に、自他の隔てあるべからずと  
 云へり。」

慶長見聞集卷の十終

珍袖名著文庫

全部百册

▲每篇紙數二百頁▼並製正價一册金廿錢●六册金壹圓拾四  
 錢●拾二册金四拾錢●廿五册金四圓六拾錢●五拾册金九  
 圓●全部百册金拾七圓五拾錢●上製一册二付金八錢増シ

明治卅九年六月二十日印刷  
 明治卅九年六月廿八日發行

慶長見聞集奥 上製定價金廿八錢  
 並製定價金貳拾錢

校訂者

芳賀矢一

發行者

東京市神田區裏神保町九番地  
 會社 富山房

代表者

同所合資會社 富山房社長  
 坂本嘉治 馬

印刷者

同市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地  
 森潤 二

印刷所

全株式會社 秀英舍第一工場

不許複製製



94  
112

# 庫文著名珍袖

錢四各稅郵錢廿册一製並錢八廿金册一製上價定册百一部全

## 次 目 刊 既

第一編 蝶夢芭蕉翁繪詞傳附句集 幸田露伴先生校訂(第廿三編)  
 第二編 近松淨瑠璃集三種 尾崎紅葉先生校訂  
 第三編 雨月山人 尾崎紅葉先生校訂  
 第四編 曲人 尾崎紅葉先生校訂  
 第五編 今昔物語十卷 尾崎紅葉先生校訂  
 第六編 近江言志 尾崎紅葉先生校訂  
 第七編 西風集 尾崎紅葉先生校訂  
 第八編 狂言集 尾崎紅葉先生校訂  
 第九編 俳諧集 尾崎紅葉先生校訂  
 第十編 國語集 尾崎紅葉先生校訂  
 第十一編 世説集 尾崎紅葉先生校訂  
 第十二編 日日集 尾崎紅葉先生校訂  
 第十三編 萬花集 尾崎紅葉先生校訂  
 第十四編 花鳥集 尾崎紅葉先生校訂  
 第十五編 綴手摺 尾崎紅葉先生校訂

## 校訂編輯擔任

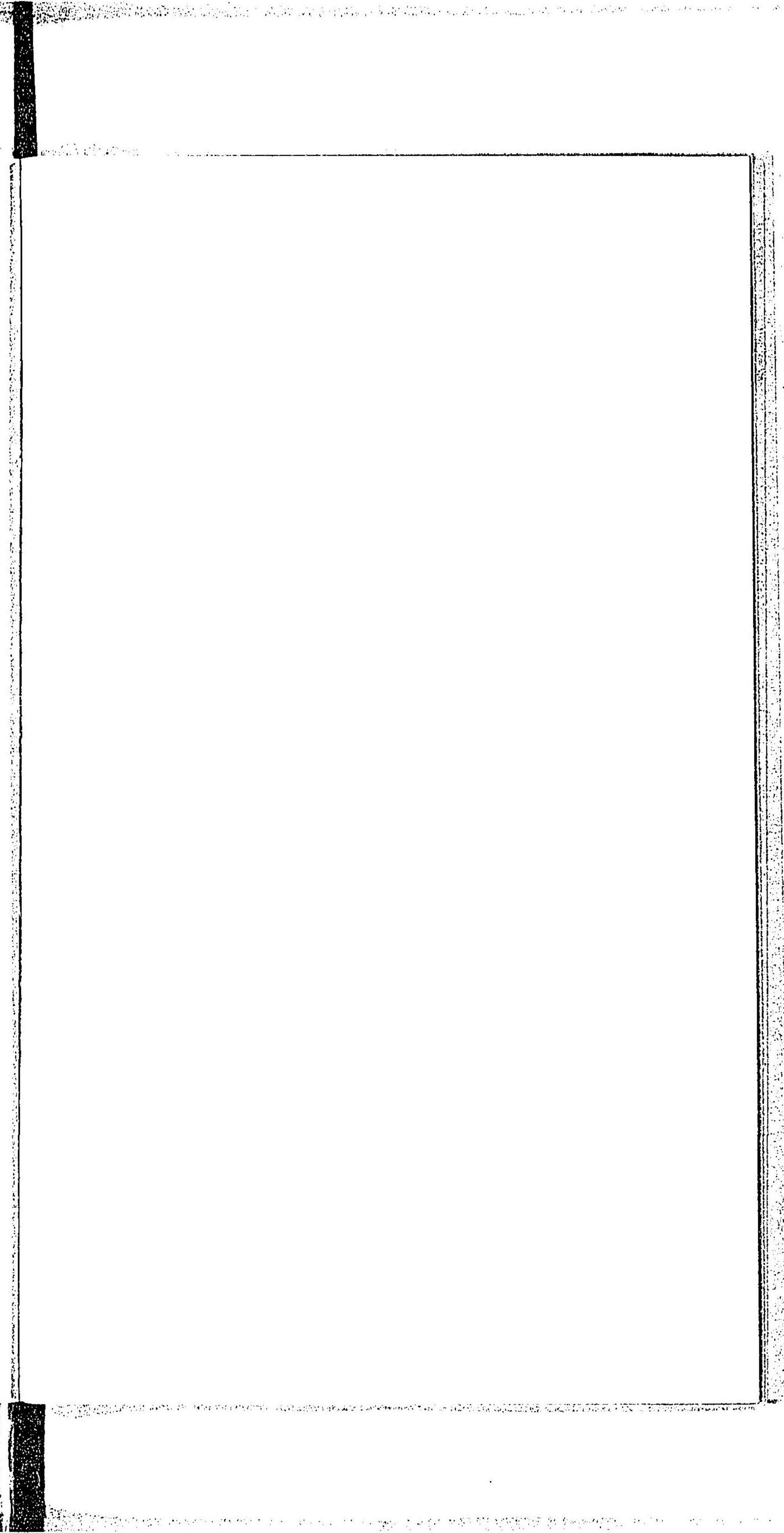
幸田露伴先生  
 芳賀三味先生  
 宮崎三味先生  
 上田萬年先生  
 關根正直先生  
 藤岡太郎先生  
 尾崎紅葉先生

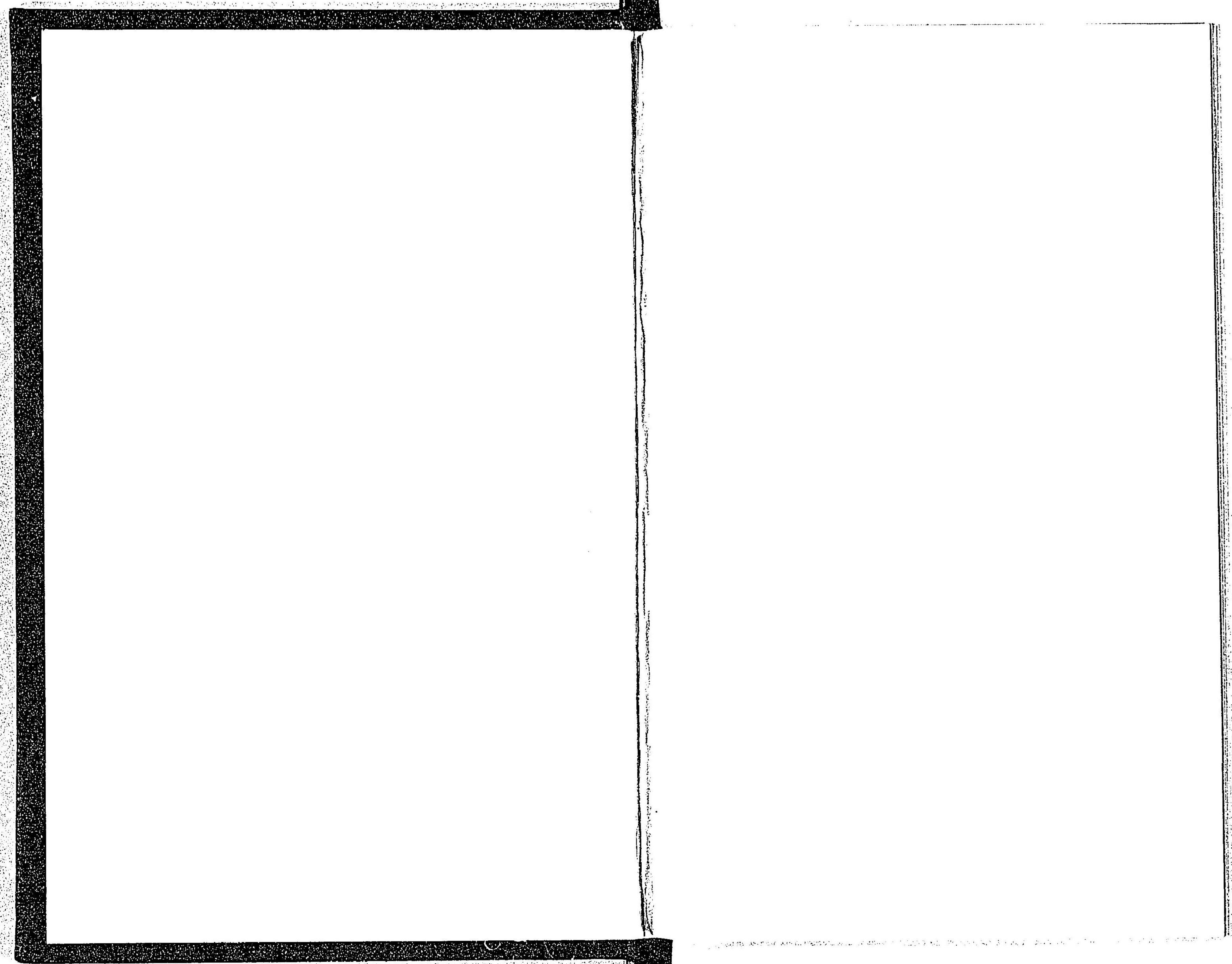
全 後 編  
 夢想兵衛胡蝶物語  
 (全 第廿三編)  
 全 後 編  
 假名手本忠臣藏  
 芳賀三味先生校訂(第廿四編)  
 慶長見聞集  
 芳賀三味先生校訂(第廿五編)

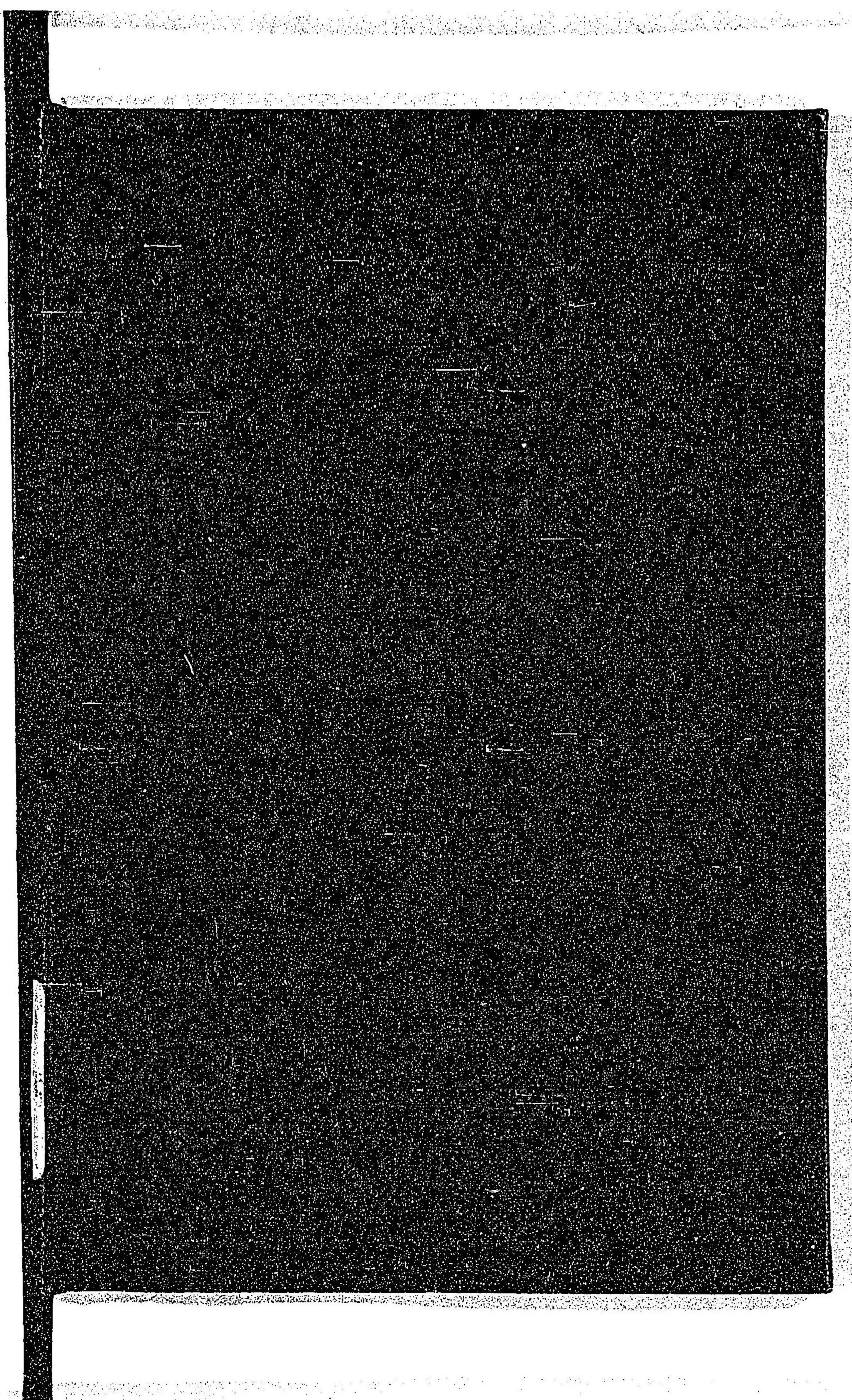
五十首順

47K-5

80







94

112

102295-000-8

94-112

慶長見聞集

三浦 茂正 (浄心) / 著

M3.9

EAG-0110



